

幼虫を見て 岡崎市緑丘保育園（愛知県岡崎市）

< 1、2歳児 >

[事例1]

< 2歳児 >

蚕を箱に入れて育てる。（3歳児以上の子どもたちが熱心に飼育している環境がある）

ぐんぐん大きくなる蚕を見て「新幹線みたい」「おばけー」「へびー」とイメージして口々に言い楽しんでいる。そのうちコロんとあお向けになって起き上がれない蚕を発見する。指でコロんとさせ、もとにもどしてくれる子どもでてくる。その場面を見ていた子が「やったー」と言って喜ぶ。保育士も一緒に喜ぶと共感し合えた。

日が経ち、繭になって中から蚕蛾が出てくるのを見て「チョウチョさんでおいでー」と言いながらひとつひとつ手で触ったり、蝶のまねをして飛ぶ動きをしたりする子ども見られた。

（2歳児の中でも大きい年齢の子どもたちの姿です。）



『はらぺこあおむし』
の絵本を何度も経験
している。



[事例2]

アゲハチョウの幼虫（青虫）を育てる。幼虫を見て「かわいいね」「こわーい」とそれぞれの表現で伝えてくる。1歳児も2歳児の様子を見て寄ってきて「虫ー」と言ってじっと見いつている。

そのうち、2歳児の子が1番大きい幼虫を指差し「これはおとうさん」、中くらいの幼虫を指差しして「これはおかあさん」、そして1番小さい幼虫を指差しして「これは赤ちゃん」と言う。1歳児もじっと聞いている。

飼育ケースの上に登ってきた幼虫を見て、「落ちる」「落ちる」と手で支える子どもいた。次第にサナギになる時期になり、えさを食べなくなってくる幼虫がでてくるのを発見する。「これは、寝てるね」と言う。よく食べている幼虫を見て「これは元気」と言う。



考察

乳児クラス（1・2歳児）も保育士や4・5歳児の姿をよく見ており、大きい子と同じような飼育環境の中で一緒に小動物を見たり触れたりする機会を意図的に用意すると、興味を示してくる子がいる。虫の姿を見て、3歳になった年齢の子2～3人が会話を始める。

こうした周りの環境の中で生活をしていると、まだ言葉の少ない子どもも耳で聞いてちゃんと記憶し言葉を獲得し、自分なりの表現で、部分的に参加する姿が現れてくる。はじめ「こわーい」と言って虫を見ていた子どもも「かわいいね」と言って優しく虫にかかわろうとするようになる。

愛情いっぱい0・1・2歳保育の中で、信頼できる保育士がいつも子どもから発する言葉を聞いてあげる姿勢から、自分も話そうとする姿が変わっていく。安心できる人的環境の下で、居心地よく生活経験をし、周りのことにも関心を持てるようになってくる。

「科学する心を育てる」感性は、乳児期の子ども一人ひとりが情緒の安定を確保した上での積み上げがあって広がっていくことを感じる。

みどころ

1、2歳児なりに目の前のものと「虫」という言葉と結びつけて様々なことを感じています。感じたことや思ったことを、自分が知っている言葉や動きで表しています。初めの感じたままに出てきた表現は、虫をよく見たり触れたりすることで「チョウチョになる虫」「色々な大きさだけど家族（仲間）」「たくさん食べているから元気」など、生き物として意識した表現になっています。知っていることと結びつけて、興味深く見たりかかわったりする姿に変容していることが分かります。